

# 土木学会四国支部「土木紀行」No.88

## 「岩津橋」(支部)

吉野川の池田ダム下流で川幅が最も狭くなる箇所に架かるのが「岩津橋」です。吉野川河口から約 40km 上流に位置し、徳島県道 139 号(船戸切幡上板線)の一部で、北岸の阿波町と南岸の山川町を結ぶ、古くから渡し場「岩津渡し」があった、地域にとって重要な場所に架かる橋です。

橋の諸元は、橋長 175m、全幅 11.25m(車道 7.25m、側帯 0.5m、歩道(下流側のみ) 2.5m、地覆 1.0m)で、北岸に鉄骨鉄筋コンクリートの主塔とアンカーレッジを一体化したシングルタワーを有する、マルチファン型綱床版箱桁斜張橋といわれる近代的な橋となっています。総事業費はおよそ 25 億円(工期：昭和 62 年(1987)～平成 5 年(1993))でした。

写真 2 から分かるように、この付近の地形は南岸(右岸)側に山が迫り、川幅が狭隘で深いため、台風時の風速が増す可能性があります。そのため耐風安定策として、箱桁断面を扁平(桁高 1.8m)にして、両側にフェアリングと呼ばれる平たい三角断面の金物を取り付け、風の流れをスムーズにして風下に空気の渦ができないような配慮がされています(写真 3)。徳島県内では末広大橋(園瀬川、徳島市昭和町-新浜町間)、あいせん橋(新町川、徳島市藍場町-西船場町間)に次ぐ、3 番目の斜張橋として完成しています。

現在の岩津橋以前は、昭和 33 年に完成した第一岩津橋が人道橋として R C 主塔を持つ「二こう式補剛構つり橋」で架けられまし



写真 1 岩津橋(右岸上流側より)



写真 2 上空から見た岩津橋(右岸下流側より)



写真 3 箱桁の様子(左岸下流側より)

た。また昭和 46 年には、その直上流に並ぶようにして第二岩津橋が架けられました。この橋は車両重量が 9 トンに設計された鉄骨主塔を有する重橋床式つり橋という、当時最新式の橋でした。第二岩津橋に限らず、吉野川には当時の最新技術をふんだんに取り入れた橋梁が数多くあります。



写真 4 岩津橋の下流（右岸橋詰より）

岩津橋が架かる岩津地点は最初にも紹介しましたが、吉野川の下流で最も川幅が狭まる場所（前後の川幅の半分以下）で、その川幅 150m 程度しかありません(写真 1～4)。

したがって洪水が起こると最も氾濫しやすく、下流の土地は水浸しになる可能性があります。そのため岩津で流れる洪水流量は吉野川の洪水防御を計画する時に大変重要な値になります。洪水計画で使う流量の 1 つ基本高水というのがあります。これは計画規模の雨（想定している大雨）が降ったとき、上流のダムや遊水池などの人工的な施設で洪水を制御しなかったときに観測場所を流れる洪水流量のことですが、吉野川（岩津）の基本高水流量は  $24,000\text{m}^3/\text{s}$  で日本一となっています。



写真 5 主塔とアンカーレッジ

岩津の杉尾神社には、郷土の洗哲で忠君愛国の歌人だった岩雲花香（いわくもの はなか、1792～1869 年）が、孝明天皇(1831～1866)拜謁後に帰郷した際、自分で建立した神代文字の歌碑があります（「波の間に出でて見えなむつぬさはふ岩津の淵の底のまなづは」）。書かれている歌の意味は、岩津の淵の主であるといわれる大なまずに例えて、日頃は目立つことがなくとも一朝事あるときは社会に貢献できる人間になってほしい、という内容のようです。

参考文献：

坂本好 著、「阿波の橋めぐり」、(株)アルス製作所創立 50 周年記念誌刊行会、1999 年。  
(財)とくしま地域政策研究所 編、「吉野川事典」、(社)農村漁村文化協会、1999 年。

土木学会四国支部「土木紀行」 <http://doboku7.sakura.ne.jp/kikou/kikou.htm>  
土木学会四国支部 <http://www.jsce7.jp/>